



Title	A Passion for Transcendence : A Radical Theological Critique of Humanism
Author(s)	Govorounova, Alena
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44853
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	ゴヴォルノフ アリョーナ GOVOROUNOVA ALENA
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 18841 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	A Passion for Transcendence –A Radical Theological Critique of Humanism– (文化的構築としての人本主義ーポストモダン批評ーポストモダニスト及び哲学的神学における人本主義への批評ー)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 ヨコタ村上ジェリー (副査) 教 授 木村 茂雄 助教授 ヨコタ村上孝之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、人本主義におけるポストモダニスト批評に焦点を当て、それが文化的研究の学問的風潮にどのように影響しているか、またポストモダニズムと関係がある分野にどのように影響しているかを考察する。現在の学問的風潮から見ると、人本主義は一般的に世俗のイデオロギーとして理解される。これは人間の墮落を強調し、人類の歴史を墮落としてとらえている中世の教会によって余儀なくされた、前近代における支配的な解釈に反するものとして、西洋における哲学の伝統から生じたものである。人本主義は、世俗的な運動の一つとして多様な意味合いを持っているが、本論文で筆者は人本主義を狭い意味、つまりモダニストによって作られた人間の歴史的な進歩および人間存在への礼拝化（divinization）という「イデオロギーの集合体」として取り扱い、これに対し批評を行った。

人本主義におけるポストモダニスト批評は、その方法論において人本主義におけるコンテンポラリーな哲学的神学の批評にも類似している。それで、本論文ではモダニズムにおける人間中心的な認識論（anthropocentric epistemology）の分析を行うに当たって、神学的なアプローチとポストモダニスト・アプローチという2つの視点から批評を行った。

本研究の目的は以下のようである。

- 1) 神学は宗教的で人本主義は世俗主義という、現在の哲学における流れに異議を提起し、宗教的というカテゴリは、神学ではなく人本主義と関わっているカテゴリであることを明らかにする。
- 2) 人本主義とは何かを研究することによって、逆に「哲学的な神学」とは何かという、定義とその領域を明らかにする。
- 3) ポストモダニズムとは何かを、人本主義への批評の枠組みの中で考察する。
- 4) 「人本主義」の概念に対して再定義を提案する。
- 5) 人本主義における研究は現在、哲学的神学の枠組み及びポストモダニズムの枠組みの中でそれぞれ行われている。しかし、本論文では、この2つの枠組みを比較・対照することによって、モダニズムにおける人本主義的思想に対するポストモダニズム批評の自己矛盾の要素に関して、哲学的神学の観点から批評を行う。

本論考では、人本主義への批評を行うにあたって有効な2つのフレーム、つまりマクロとミクロの2つのフレームを使い、マクロなフレームとしては、イデオロギーにおける系譜学理論を、そしてミクロフレームとしては、「人間中心主義 (anthropocentrism)」及び「デカルトの認識論的二元論」をつかっている。Althusser-Lamm によると、人間存在における優勢なメタ言説、つまり前近代における神中心的なメタ言説、モダニズムにおける人本主義的メタ言説、ポストモダニズムにおける反人本主義的メタ言説などは、そのような優勢な信念体系であるといえる。本論文では、人本主義的イデオロギーにおける系譜分析を行うため、Foucault の知識における系譜学理論 (archaeology of knowledge) を採択した。イデオロギーの系譜学は、そのイデオロギーを人間存在における支配的な言説として受け止めた権力の構造及びイデオロギーにおける歴史的な推移の分析を可能にするからである。

ポストモダニズムは哲学的神学に反する立場を取っていると考えられているが、本研究ではポストモダニズムと哲学的神学が、相違点だけではなく共通点も持っているということに注目し、人本主義への批評という方法論的な立場からは類似しているが、前提となっているイデオロギーにおいては互いに異なっているという観点から考察を行った。

さらに本論文では、現在までの先行研究において中心となっている人本主義への批判だけでなく、哲学的神学の観点からポストモダニズムへの批評を試みた。

本論文では、ポストモダニスト及び哲学的神学のアプローチにおける人本主義への批評をするに当たって、その共通点と相違点を記述・考察した。まず、モダニストに対するポストモダニスト及び哲学的神学からの批評における共通点をみてみよう。哲学的神学とポストモダニズムは、モダニストの「人間中心主義」及び「理性と信念の絶対区別論」に基づいているデカルトの認識論的二元論に対して、それぞれ独自の方法を用いて批評を行っている。この2つの批判的アプローチは、人本主義的理性への根本的な不信、そして独自の主体 (autonomous Subject) というモダニストの概念、つまり世界を客観的に認識し自分と社会を合理的・客観的に統治し改善する能力を持っているということに対しては批判的という点から共通している。ポストモダニズムは、すべての言説が修辞学 (rhetoric) であり、従って完全に客観化するということは不可能であると見る。

次は、モダニズムに対するポストモダニスト及び哲学的神学からの批評における相違点をみてみよう。ポストモダニズムは、モダニズムにおける他者への概念的曲解や間違った解釈、他者への軽視などに対して批判的な立場をとる。モダニズムは創造主との垂直的関係の重要性を否定し、他者を、人間における自己認識の過程において主要な構成要素として受け止めた。進歩における人本主義的イデオロギーは、自己 (the Self) が他者を評価する強者対弱者の二重のヒエラルキー的構造を暗示する。

このような二重のヒエラルキー的秩序に基づいたモダニズムは、結果的に排他的要素を持つメタ言説を創り上げた。そしてポストモダニズムによる「メタ言説への不信」は、抑制の体系を意味する手段として長い間用いられてきた、人間存在におけるすべての包括的メタ言説を破壊するために現れた。

一方、神学的批評では、ポストモダニズムが二重のヒエラルキー的秩序の存在論的二元論を解体することは不可能であると主張する。つまり、以前に軽視された階層が、今度は逆に抑制の手段として用いられる可能性は十分あるからである。自己認識の手段として他者との水平関係 (Other-directed) モデルだけを強調する限り、極端的な二重論的概念 (binary oppositions) を解体しようという試み自体が、打ち破ろうとするその抑制を永久化させる危険性もある。

ポストモダニズムは、疎外され抑圧されたグループや人々の地位や権利を回復するために、修正された合理的体系を創り上げた。しかし、哲学的神学は違う観点をとっている。つまり、哲学的神学では、人間存在における形而上学的意味の回復において、人間尊厳の概念を脱線からの矯正としてみる。つまり、人間の尊厳や人間存在の意味は、個人の進歩的な発展や個人的な業績、他者からの認定によるのではなく、創造主の無条件的な愛という事実に基づいていると主張する。

本論文では人本主義における宗教的枠組みにおいてのポストモダン批評を行っている。実証哲学と形而上学的純粋理論哲学におけるデカルトの認識論的二元論は、ポストモダニズムの猛攻撃によって崩壊され、非宗教的あるいは世俗的な思考様式と宗教的な思考様式との境界線はあいまいになってしまった。しかし、人本主義的な哲学は概念論的に宗教的であり、これを説明するために本論文では、デカルトの認識論的二元論を超越するポストモダニズム批評

を応用した。

人本主義における宗教的フレームを分析するに当たって、ポストモダニストは人間中心論的合理主義に対して批評を行っている。合理主義者のモデルは、人間の知性が客観的に世界を認識し、精神と外部世界の間の媒体である言葉という手段によって自然の法則を説明することが可能であると仮定する。このような人本主義における合理主義的モデルは、科学と宗教、宗教と哲学、哲学と科学の間にそれぞれギャップをつくった。

一方、ポストモダニズムでは、人本主義における認識の二元論的構造に対して相当批判的である。ポストモダニズムによると、言葉は精神と実在の間の媒体ではなく、精神が外部世界を解釈する方法を構築する物質的な実在そのものであり、従って科学は本質的に世界における解釈的モデルを提示する。宗教と世俗の理性、内部と外部における境界線を曖昧にすることによって、ポストモダニズムは、前近代において支配的なメタ言説であった宇宙時世界観を提示する。

本論文では、宗教における人本主義的枠組みのポストモダン批評も提案し、律法主義的な宗教の構造は、本質的に人本主義に基づいた考え方であることを論じ、世俗的な人本主義の道德性及び律法の啓示である宗教における宗教的道德性は、独立した人間進歩のイデオロギーを永続させる、二元論に基づく人本主義のパラダイムに過ぎないということを明らかにした。さらに、人本主義の二元論について批評を試みたが、人本主義的霊性というポストモダニスト概念は一元論のパラダイムとなっていることから、人本主義の二元論を超越する尺度としては不十分であると筆者は思う。したがって、人本主義における二元論の限界を超越するものとして、三元論に基づいている哲学的神学のパラダイムをも提案した。

まとめると、律法主義的宗教におけるイデオロギーは、二重のヒエラルキー的秩序に基づいており、本質的には人本主義的イデオロギーであるといえる。ここでは、神に承認される存在になるためには、人間の業績や自己開発が必要であると強調する。つまり、神からの独自の人間進歩における人間の能力を信頼し、判断的な態度 (judgmental attitudes) 及び自己義 (self-righteousness) を暗示する。一方、律法主義的宗教のイデオロギーにおける哲学的神学の立場では、神からの承認の追求に基づいた、自己完成の宗教的・人本主義的教義にかなり批判的な立場をとり、判断的態度及び人間本質そのものを訂正しようとする試みにもかなり批判的である。つまり、人間の尊厳は、創造主の無条件的な愛に基づくものであり、神の愛は人間の自己開発によって得られるものではないと主張する。言い換えると、律法主義的宗教では、人は神の愛を受けられる存在になるためには漸進的に変化しなければならないといっている反面、哲学的神学では、神の愛だけが人間本性を進歩させると主張する。

進歩のイデオロギーとして人本主義は、本質的に人間存在の偶像化を意味し神学的宗教の盲目的賛美を繰り返す物質主義的宗教を世界に提示した。この影響によって啓蒙主義者は、神学時宗教における律法主義的構造を採択し、世界を再建する過程においてそれを利用した。これは人間知性、つまり科学万能主義の崇拝で、この地球上に物理主義的ユートピアを建設しようとする社会において、人間存在そのものに対する崇拝とされている。

モダニティにおけるメタ言説は、人本主義的樂觀主義あるいは人本主義的自己解決に基づいており、ポストモダニズムにおけるメタ言説は人本主義的懷疑主義に基づいている。一方、哲学的神学が現在回復を試みている権威ある神学的メタ言説は、モダニティやポストモダニズムにおけるメタ言説、つまり人間主義的懷疑主義対有神論的救出 (theistic redemption) の言説である。

更に本論文では、ポストモダニズムにおける哲学的神学の批評を行っている。つまり、哲学的神学とポストモダニズムが、人本主義への批評における共通点と相違点を持つにいたる理由について分析し、ポストモダニズムが超越的な形而上学を拒んでいるにもかかわらず、実際には存在中心論 (logocentrism) を避けられないということについて論じている。詳しく言うと、ポストモダニズムでは、反メタ言説的であることを主張する。しかし、ポストモダニズムは本質的にそれ自体として物質論的形而上学に基づいている、ひとつの巨大なメタ言説である。従って、ポストモダニズムは修正された支配の体系に転換されてしまう危険が高い。

本論文では、世界観における系譜研究として、神中心的・形而上的及び人間中心的なメタ言説の系統を追跡した。ポストモダニズムはそれ自体でモダニズム、つまり人本主義の典型に反するひとつの運動である。従って、人間存在の主要な言説に関連して発生した知的な風潮がどのように移行したかを追跡することは重要である。この知識の起源における分析を行うにあたって、筆者は Foucault が詳述した系譜学のアプローチを用いた。西洋近代社会において

知識がどのように発展してきたかを説明するために Foucault は、人々に最も影響力のある説明として受け入れられる言説を作った権力のメカニズムに焦点を当てた。彼は人間主体の個人的な経験と自己認識が、どのようにしてそれを支持する言説によって形成・コントロールされているか、また、われわれの自己直観 (self-perceptions) が、どのようにして知識と権力の体系によって作られているかについても概説を行っている。

このような Foucault の系譜学的なアプローチは、世界観における起源の分析にも応用することができる。個人的な自己認識、知識人・非知識人双方における行動、そして個人生活態度を決定しコントロールするのは「人間存在」である。世界観のシフトは、この人間存在における一番優勢な説明として特定のメタ言説を受け入れるようにする、権力のメカニズムと絡み合わせられているのである。

哲学的神学とポストモダニズムは本質的に、人本主義への方法論的批評 (Methodological Critique) を行う二つのアプローチである。本論文では、人本主義に対するポストモダニストおよび哲学的神学の方法論的類似性について述べ、それらが出発した前提における大きな違いは何か、また最終的に目指しているのは何かについて考察を行った。また、その考察の結果を踏まえて筆者は人本主義への再定義を行い、人本主義とは人間の道徳、科学、社会といった局面における進歩能力に対する信念に基づく進歩のイデオロギーであると新しい定義を行った。さらに、筆者は哲学的神学とポストモダニズムが、どのように人本主義における進歩の概念を否認し拒んでいるかを考察した。哲学的神学は人間の理性を、根本時に墮落した存在で、神から独立しており超越的・絶対的な道徳の基準を持っていない、つまり自己開発および有効な自己統制が不可能な存在、それ故救いを必要とする存在として認識している。ポストモダニズムも人間の存在を脱線と墮落の面から定義を行っている。しかし、ポストモダニズムでは超越的な神の存在という概念を認めないことに加え、絶対的・普遍的道徳の概念も否定する。そのため、人本主義にオルターナティブな立場をとっているポストモダニストは虚無主義に他ならないか、それとも人本主義的普遍性を修正し新しい理論を構築する努力を続けているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代人文学の基礎となる人本主義思想の各流派を抜本的に分析したものである。

第1章では、歴史的背景として、ルネサンス以降の人本主義の形成と変遷を辿った上で、その基本となる科学的客観性や進歩の理念を概括し、そこに見られるいくつかの矛盾点を指摘している。第2章では、宗教に対するポストモダニストたちの批判を取り上げ分析している。そのなかで、現代宗教の言説がどれほど人本主義的な理論に基づいているかを指摘した部分は、特に斬新な考察と言える。本章とは対照的に、第3章では、ポストモダニストたちの人本主義に対する批判が、前近代から潜在的に残されている宗教的な理論にいかにかに依拠しているかについて論考している。第4章では更に、ポストモダニストたちが宗教に対しても人本主義に対しても批判的なスタンスをとっているにもかかわらず、その批判が依然としてヒューマンイズムのパラダイムに基づいているという矛盾が論証されている。この指摘にもまた、筆者独自の視点が感じられる。第5章で、ポストモダニズムの流れを汲むトランス・ヒューマンイズム及びポスト・ヒューマンイズムについて論じた後、第6章及び第7章では、以上扱ってきた全ての思想体系の根本にある二項対立論を超越する方法として、三項パラダイムの実験を試みる。その三項パラダイムとは、キリスト教神学に基づく、正義・慈悲・恩恵 (justice, mercy, grace) というパラダイムである。また、論文全体のスタイル上の特徴として、筆者は、寓話 (アレゴリー) や比喩談 (パラブル) の形式を多用している。

筆者が提示しているパラダイムや論述のスタイルは、一見すると学術論文としての体裁を外れるもののようにも思われるが、筆者は、それらを排除する支配的な批評の基準こそ矛盾を孕み、問題視すべきものであると主張している。第2章から第7章まで一貫して「人間解放」という概念を取り扱っているが、それに関連してヒューマンイズムもポストモダニズムも、精神-物質二分法の問題の解決として、究極的には、物質主義崇拝を温存した解決しか提供していないという、現代思想の逆説的な限界を示していると言えるであろう。膨大なテキスト精読に基づいて高遠なヴィジョンを綴ったこの論文は、博士 (言語文化学) の学位論文として十分に価値あるものと認めるものである。